

2015年度ディプロマ・ポリシー到達度評価

—看護学生による自己評価アンケート結果の分析から—

松本尚子 ¹⁾	大島弓子 ¹⁾	山根友絵 ¹⁾
永井邦芳 ¹⁾	村松十和 ¹⁾	西澤和義 ¹⁾
蒔田寛子 ¹⁾	三輪木君子 ¹⁾	古賀節子 ¹⁾
榊原千佐子 ¹⁾	山口直己 ¹⁾	五十嵐慎治 ¹⁾
野村 浩 ¹⁾	大瀬恵子 ¹⁾	廣瀬允美 ²⁾

抄録

ディプロマ・ポリシーに対しての到達度に対する学生評価を検討し、学生がとらえた到達度を明らかにすることを目的とし、2015～2013年度生の学生を対象にアンケート調査を行った。

ディプロマ・ポリシー7項目において、学年による各項目の到達度は、1年次は「やや身についた」の割合が、2・3年次は「ほぼ身についた」の割合が高かった。各項目の到達度の学年比較では、学年が進むにつれ「身についた」群の割合が高い傾向にあった。学年間における回答割合に有意差が認められたのは、対象理解、倫理性、看護実践力、社会的貢献、協調性であり、中でも、倫理性と協調性は3年次で「身についた」群が80%と高かった。研究力、イノベーションは有意な差を認めなかった。学年ごとの到達目標を具体的に示した上での縦断的な調査や、客観的な評価の実施などとともに、ディプロマ・ポリシーに到達するための具体的な教育について検討することが課題であると考えられた。

キーワード (keyword)

ディプロマ・ポリシー (Diploma Policy), 到達度 (Achievement), 看護学生 (Nursing Student)

I. はじめに

大学教育の質向上を図る上でディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーが重要であり(文科省, 2016)、看護基礎教育のさらなる充実が求められている。ディプロマ・ポリシーは、卒業認定、学位授与の方針を示すものであり、学生に獲得してほしい能力である。豊橋創造大学保健医療学部看護学科(以下、本学)では、卒業時、学位授与時に獲得してほしい能力として、1. 対象理解、2. 倫理性、3. 看護実践力、4. 社会的貢献、5. 研究力、6. イノベーション、7. 協調性の7つの要素を挙げている(大島ら, 2016)。7つの要素についての具体的内容は表1に示す。

1) 豊橋創造大学保健医療学部看護学科 2) 前 豊橋創造大学保健医療学部看護学科

ディプロマ・ポリシーは、学生の学修成果の目標となるものでもあり、その能力を獲得するためにカリキュラムが編成されている。このカリキュラムについて本学では、2014年度、2015年度に行った改正カリキュラムの検討過程とその成果についてまとめているが、その中で今後の課題として、カリキュラム評価を多面的に行うこととしている（大島ら、2016）。

多面的評価の1つにカリキュラムの到達として査定の必要なディプロマ・ポリシー評価がある。しかし、ディプロマ・ポリシーをどう評価するかという点については、検討すべき課題も多い。客観的評価として、GPAなどの成績の視点からの評価がその一つであるが、カリキュラムを受ける学生自身が自己の能力についてどの様に評価しているのかという主観的評価も重要な要素と思われる。また、カリキュラムが能力獲得に向けて段階的に運用されていることから、能力形成過程の観点からの評価も外せない重要な要素と思われる。先行研究では、学生がディプロマ・ポリシーに掲げられた能力を卒業時までどの様に身につけていくのかについて報告されたものはほとんどみられない。学生のディプロマ・ポリシーに対する認識や到達度を知ることは、学生の成長を知り、教育方法や教育の背景を考えることにつながる。このことは、4年間のカリキュラムの中で、学生の段階的な成長過程を把握することになり、今後のカリキュラム検討を行うための有用な資料となると考える。そこで本学では、学生を対象にディプロマ・ポリシーに対する認識や到達度についてアンケート調査を実施した。

表1. 本学のディプロマ・ポリシー

① 対象理解	看護の対象となる人々を、生物・心理・社会的な面から統合的に理解するための広い教養と専門的な知識・技術を身につけている。
② 倫理性	看護職者として必要な倫理性を兼ね備え、人々の多様な価値観を受け入れ尊重する姿勢を身につけている。
③ 看護実践力	看護における顕在的・潜在的課題に対し、科学的根拠に基づく適切な判断と、解決していくための実践能力を身につけている。
④ 社会的貢献	変化する社会の中で看護が果たすべき社会的責務を理解し、国際的な視点を含め、広く地域の健康に貢献できる基礎的能力を身につけている。
⑤ 研究力	看護にかかわる事象を科学的に探究するための基礎的な研究能力を身につけている。
⑥ イノベーション	生涯にわたって看護を探究し、創造・革新していくための基礎的能力を身につけている。
⑦ 協調性	保健医療福祉チームの一員として、看護職者の役割を理解し、多職種間で連携・協働できるための基礎的能力を身につけている。

目的

本学のディプロマ・ポリシーに対しての到達度に対する学生評価を検討し、学生がとらえた到達度を明らかにする。

II. 方法

1. ディプロマ・ポリシー作成の経緯

2015年度改正カリキュラム作成時にディプロマ・ポリシーの検討を行った。検討過程では、カリキュラム検討委員会の各委員の看護及び教育への意義、価値観、看護に影響を与えている医療環境、社会状況の変化も加味し、さらに他学の状況も調べ討議を重ねた。内容は、医療および医療を取りまく環境の変化に対応し、他職種との協調性を持っていること、社会的貢献に対して国際的な視野からも捉え考えることが出来、さらに変革していくことが出来るための基礎的な能力を取り上げた。また、看護学および看護職に普遍的に大切な全人的な対象理解、倫理観、研究力、そしてコアの位置づけともなる看護実践力の修得をあげることとし、看護学科全体で討議し共通認識した後、策定に至った(大島他, 2016)。

2. ディプロマ・ポリシーの周知

ディプロマ・ポリシーは、本学のホームページ上で社会に向け公表しており、在学生や保護者に対しては、年度当初のガイダンス時、保護者懇談会等で周知している。また、各科目にはこの能力を反映した内容をカリキュラムマップで示し学生にも提示している。

3. 学生へのアンケート調査

1) 対象および調査時期

対象：保健医療学部看護学科2年生(2015年度入学生)82名, 3年生(2014年度入学生)88名, 4年生(2013年度入学生)92名の計262名

調査時期：2016年4月

2) 調査方法

2016年4月初旬のガイダンスに出席した2～4年生全員に自記式質問紙を配布し、その場で回収した。ディプロマ・ポリシー各項目の到達度の自己評価について、「身についた」、「ほぼ身についた」、「やや身についた」、「身についていない」の4件法で回答を求めた。

3) 分析方法

学年別にディプロマ・ポリシーの項目ごとに単純集計により「身についた」、「ほぼ身についた」、「やや身についた」、「身についていない」の回答を集計しその割合の差をみた。さらに、「身についた」、「ほぼ身についた」を『身についた群』、「やや身についた」、「身についていない」を『身についていない群』の2群に分け、各学年における2群の割合について χ^2 検定を用いた。

なお、統計分析にはSPSS.version 20を使用し有意水準を5%以下とした。

4) 倫理的配慮

アンケートは無記名であり、個人は特定されないこと、アンケートの回答は自由意志によるものであり、個人の成績評価には一切関係しないことをアンケート用紙に明記した。さら

に、本調査はカリキュラム評価の一貫として行うものであり、学生にはその目的を説明し協力を求めた。また、結果の公表について同意の有無を確認し、同意しないものは分析対象に含めないこととした。

なお、アンケート実施時期は4月のガイダンス時に実施しており、2年生（2015年度生）は過去1年間、3年生（2014年度生）は過去2年間、4年生（2013年度生）は過去3年間の期間について回答を求めている。よって、ここでは、2年生を1年次、3年生を2年次、4年生を3年次と表現する。

Ⅲ. 結果

結果の公表に同意しないものを除いた、1年次75名（91.5%）、2年次82名（93.2%）、3年次76名（86.6%）の計233名を分析対象とした。

1. ディプロマ・ポリシーの各項目に対する到達度

1年次の到達度は、図1に示すように、ディプロマ・ポリシーの7項目において、「やや身についた」の割合がもっとも高かった。このことは、身についたと感じている人が少ないことを示していた。イノベーションは「やや身についた」「身につけていない」で64%を占め、身につけていないと感じている学生が多くみられた。この傾向は対象理解と看護実践力でも挙げられていた。逆に1年次で「身についた」、「ほぼ身についた」と回答した割合が高かったものは、倫理性と協調性であった。倫理性はおよそ17%の学生が「身についた」、36%の学生が「ほぼ身についた」と回答している。また、協調性についても「身についた」、「ほぼ身についた」を合わせると56%であった。

2年次の到達度は、図2に示すように「ほぼ身についた」と回答する項目が多かった。しかし、研究力は、「ほぼ身についた」よりも「やや身についた」と回答する割合が高く、他と比べ「やや身についた」、「身につけていない」が多かった。研究力の能力が、身につけていないのではないかと感じている学生が多いと思われた。

3年次の到達度は、図3に示すように「ほぼ身についた」と回答する項目が最も多かった。また、すべての項目で「身についた」、「ほぼ身についた」を合わせるとその割合が50%を超えていた。中でも、倫理性と協調性の2項目の割合が80%前後を占めていた。

2. ディプロマ・ポリシー到達度に対する学年による比較

回答の結果を「身についた群」と「身につけていない群」の2群に分け、その割合について学年による比較を実施した（ χ^2 検定、 $p < 0.05$ ）結果を図4～図10に示した。

ディプロマ・ポリシー7項目すべてで1年次よりも2年次、2年次よりも3年次において「身についた群」の割合が高い傾向にあった。

学年間における、回答割合に有意差が認められたのは、対象理解、倫理性、看護実践力、社会的貢献、協調性の5項目であり、特に倫理性と協調性については1年次から「身につ

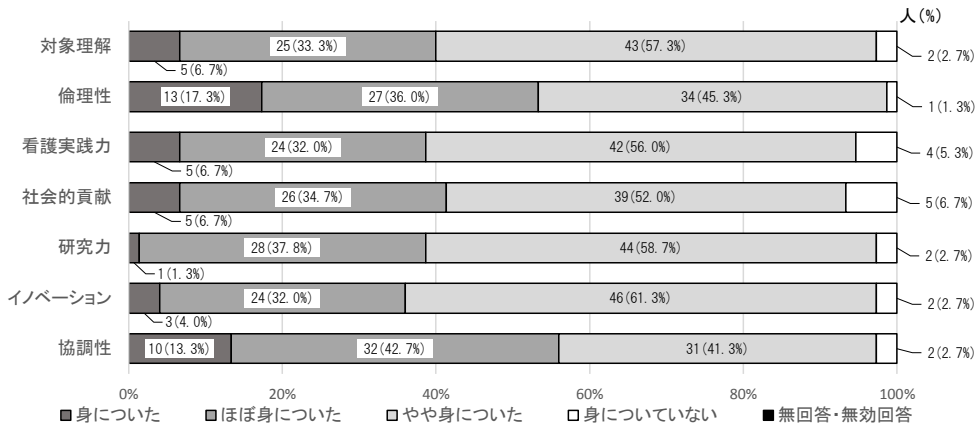


図1.ディプロマ・ポリシー到達度「2015年度生(1年次)」 n=75

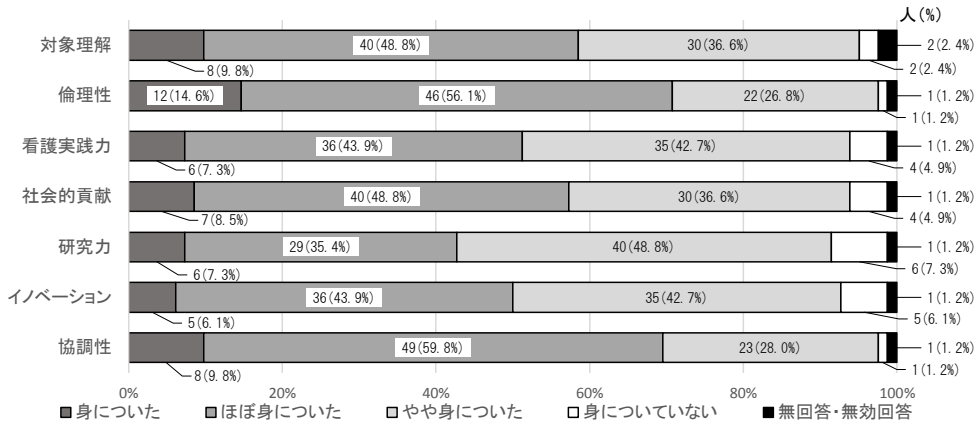


図2.ディプロマ・ポリシー到達度「2014年度生(2年次)」 n=82

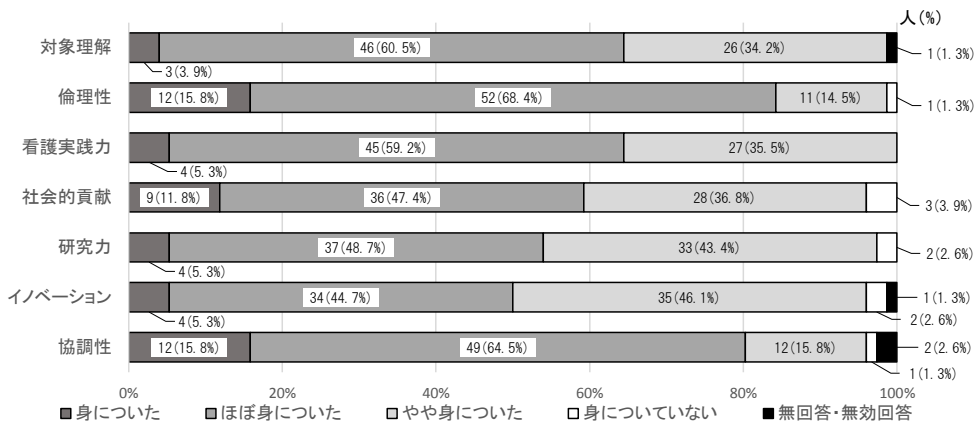


図3.ディプロマ・ポリシー到達度「2013年度生(3年次)」 n=76

た群」が50%を超えているが、3年次には80%と有意に高くなっていた。また、有意差が認められなかった研究力とイノベーションにおいても、学年が上がるにつれ「身についた群」の割合が高い傾向がみられた。

1年次と2年次の間で割合の差が大きかった項目は、対象理解(20%差)と倫理性(18.3%差), 社会的貢献(16.7%差)であった。割合の差が小さかった項目は研究力(4.5%差)であった。一方、2年次と3年次の間で回答割合の差は全体的に小さい傾向にあったが、その中で差が大きかったものは倫理性(12.6%差), 看護実践力(12.6%差), 協調性(12.0%差)であった。差が小さかった項目は、社会的貢献(1.2%差), イノベーション(0.1%差)であった(図4～図10)。

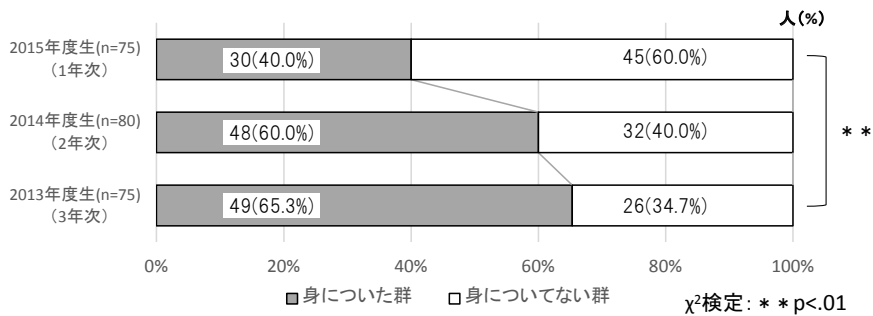


図4 ディプロマ・ポリシー到達度の学年比較「対象理解」

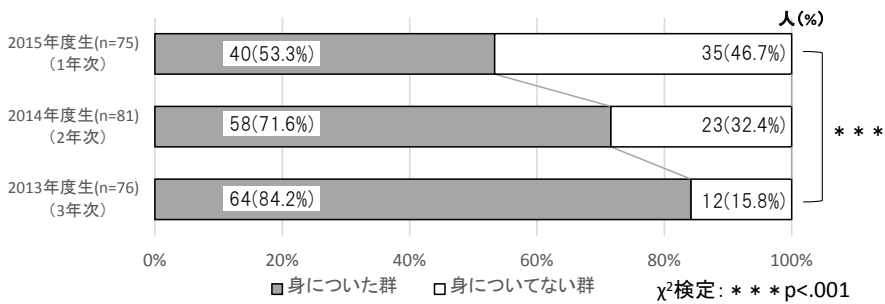


図5 ディプロマ・ポリシー到達度の学年比較「倫理性」

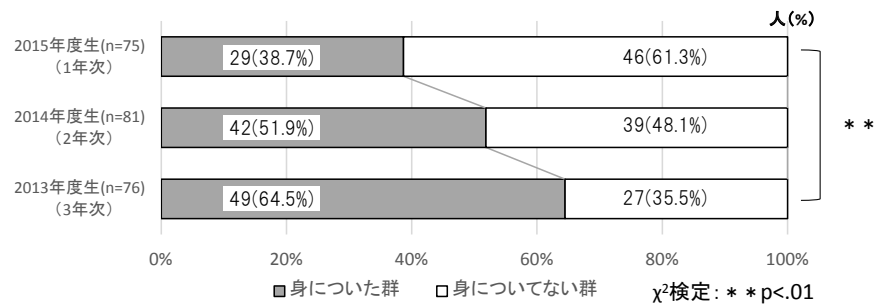


図6 ディプロマ・ポリシー到達度の学年比較「看護実践力」

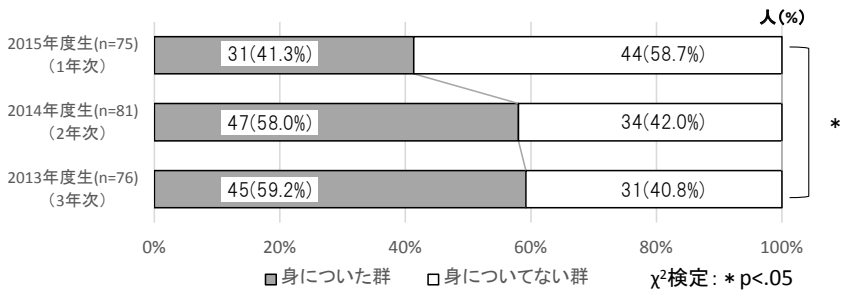


図7 ディプロマ・ポリシー到達度の学年比較「社会的貢献」

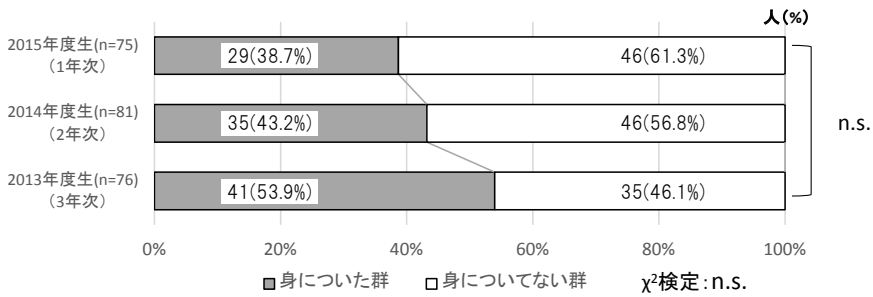


図8 ディプロマ・ポリシー到達度の学年比較「研究力」

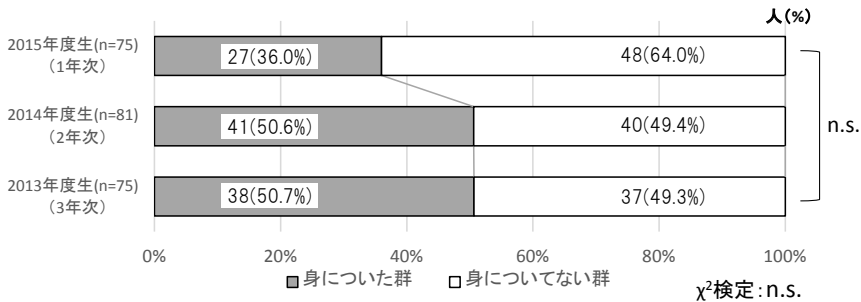


図9 ディプロマ・ポリシー到達度の学年比較「イノベーション」

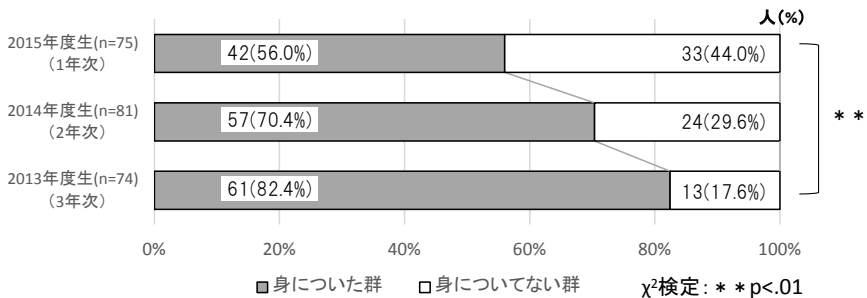


図10 ディプロマ・ポリシー到達度の学年比較「協調性」

IV. 考察

対象理解は、各学年の到達度の結果より、1年次は60%以上、3年次は約35%の人が「やや身についた」と回答していた。1年次は、対象理解が十分に修得できていない時期として考えられるが、領域別実習を経験している3年次にとって35%の学生が「やや身についた」ととどまっていることは、対象理解に対する教育内容が十分ではないことが推察される。しかし学年による比較の結果からは、学年が進むにつれ「身についた群」の割合が高くなっていった。この理由は、看護学の科目が増えることで対象を視る視点が増えること、その視点を活用し実習で実際に対象を理解するため、対象理解への能力が獲得できたと感じ取るからだと考える。よって、1年次から継続的に対象理解について教育のあり方を検討し、教授する必要があると考える。

看護実践力の到達度も対象理解と同様の結果が示された。3年次は、「ほぼ身についた」が約59%、「やや身についた」が約35%を示していた。3年次は、領域実習を体験しており、実践の場面に遭遇する機会があるにも関わらず、35%もの学生が「やや身についた」ととどまっていることは、実習等で学ばせる内容と学生が求める実践力の捉え方に乖離がある可能性がある。しかし一方で、学年による比較の結果を見ると、他の項目に比べ2年次と3年次の間で割合差が大きい傾向にあった。これは実習での体験が看護実践力を育てているとも言える。今後さらに、看護実践力が身についたと実感するためには、看護実践力の到達目標を具体的に提示する必要がある。

倫理性は、各学年の到達度の結果より、1年次より半数以上の学生が「身についた」、「ほぼ身についた」と回答しており、教育的な効果が得られているのではないかと考える。学年による比較の結果から、「身についた群」の割合が1年次～3年次で50%以上であった。この理由として、学年が進むにつれ看護学の学びが増え専門職者として必要な倫理の視点が広がることや、人として生活経験を積み重ねていく中で社会性が養われることが要因と考えられる。また、2年次の基礎看護学実習Ⅱや3年次の領域別実習では臨床現場での倫理的な問題に遭遇し、考える機会を多くもつこと、さらには実習で遭遇する経験が講義で学んだ内容とつながることで、より現実的となるため、学生にとって倫理性が身についたと実感しやすいからだと考える。しかしながら倫理性は、人々の多様な価値感を受け入れるとしており、学生自身がこの到達度内容を理解して「身についた」と回答しているのかについては、検討の余地がある。教員間で倫理性を示す教育内容をよく議論し、学生に対して教育していく必要がある。

協調性も倫理性と同様に、各学年の到達度は高く、学年による比較の結果からも、「身についた群」の割合が高かった。これは、1年次から講義や演習などのグループワークをとおり、メンバー間で協力する必要性を感じる事が影響していると考えられる。さらに3年生になると実習を経験することにより、メンバー同士の関わりの中から看護は一人ではできないことを実感するため、この経験を通して協調性を感じ取っているのではないかと考える。しかし、ここでいう協調性は、看護職者の役割を理解し、多職種間での連携・協働できる基礎的能力

としていることから、この到達内容を意識して取組めるよう教育していく必要がある。

社会的貢献は、各学年の到達度の結果より、2年次、3年次の「ほぼ身についた」の割合は約48%であった。この理由は、社会的貢献の目標内容が抽象的でイメージしにくいことが考えられる。学年による比較の結果は、1年次と2年次では「身についた群」の回答割合の差が大きいものの、2年次と3年次では差が少なかった。2年次は、例えば在宅看護学や老年看護学を学ぶ中で、病院とは相違した地域の中での看護の役割を具体的に学ぶ機会が多くある。様々な領域別の看護を学ぶことにより、患者・家族を生活者としてとらえ、社会の中での看護の役割への意識が高まるためだと考える。しかし、社会的貢献の内容が抽象的で、体得するにはどんなことが必要なかイメージしにくいため、具体的にイメージできるよう教育内容に意図的に取り入れていく必要がある。

研究力は、各学年の到達度の結果より、1年次、2年次は「ほぼ身についた」が約35～37%に対し、3年次は「ほぼ身についた」が約48%であった。1年次～3年次を通して「ほぼ身についた」の割合は低い傾向にあり、その理由に、研究力の目標が高いことが要因の1つとして考えられる。学年による比較の結果は、「身についた群」の回答割合が3年次で約53%と到達度が低い項目であった。研究力は、事象を科学的に探求する基礎的な能力を身につけるとしており、3年次に看護学研究論Ⅰ・Ⅱなどの科目を通じて学修する内容となっていた。しかし、看護学研究論の科目は、領域実習と並行して行うように配置されていたことから、看護学研究論に関する学習時間が十分に確保できにくい状況であった。また、研究力は単に実習を積み重ねれば体験的に獲得できる能力ではないため、ほかの項目と比べて身についたと感じた学生が多くはなかったと考える。研究力は、学生にとっては目標が高いため、興味関心を持ち到達できるよう、実習などで「なぜ」を問いかけ、学生自身が常に疑問を持ち、考える姿勢が身につけられるような教育が必要である。

イノベーションは、2年次、3年次で「ほぼ身についた」が約44%であった。この理由は、社会的貢献と同様に目標内容が抽象的でイメージしにくいことが考えられる。学年による比較の結果は、「身についた群」の割合が2年次、3年次でほぼ同じであった。イノベーションは、看護を探求し、創造・変革してくための基礎的な能力としており、学生にとって、具体的にどんな能力が獲得できていけばよいか解りにくいため、ハードルが高いと感じている可能性が考えられる。教育の中で、イノベーションの具体的な内容を示し、イノベーションに対するきっかけを作ることが必要であると思われる。研究力やイノベーションの達成度が低い傾向にあるその他の理由として、カリキュラムマップ(大島他, 2016)と照合してみると、基礎専門科目や専門科目などに強く関係している科目が少なく、講義等を通して理解が得られにくいことも要因であると思われる。

今回、本学のディプロマ・ポリシー到達度評価をアンケート形式で、学生による自己評価の調査を行った。学生の到達度はディプロマ・ポリシーの7つの要素を評価する上で重要であり、学生による評価をフィードバックとして受け止め、教育の質改善に努めていくことは教育する者に求められているところである(杉森ら, 2009)。協調性、倫理性、対象理解、看護実践力は授業科目を通して学んだことが、実習の臨床現場で経験をすることで、知識との

つながりを認識し学びを深めることができると思われる。一方で、研究力やイノベーションでは、体験的に学ぶのではなく、実際に学んでいることを批判的思考でとらえ、学生自らが疑問に感じたり、さらによりよくするためのアイデアを生み出し行動していく能力が必要である(鈴木ら, 2015. 坂江ら2004)。今後、看護基礎教育の中において具体的に理解が得られる内容で講義、演習などを強化した教育内容を検討していくことが重要である。

本研究の限界と今後の課題

今回はディプロマ・ポリシー到達度評価の方法として、学生による自己評価の調査を行ったが、学年ごとの到達目標を示していないため、評価が感覚的になっている可能性がある。調査時期についても、3年次は領域実習の途中段階で調査を行っているため、実習での体験が回答内容に影響していることが考えられる。さらに、今回の調査は、横断的な調査であり、同一対象の経時的な変化ではない。このため、学年ごとの学生の傾向などが調査結果に影響している可能性があり、学年間の比較には限界がある。本研究では、ディプロマ・ポリシーの学生の到達度を明らかにしたが、それを育成するための具体的な教育については検討していない。

今後、縦断的な評価を行い、学生が評価しやすいような指標を提示する必要がある。また、本調査では、学生からの意見を具体的に聴取していないため、学生からの自由記載などを含めた調査の検討に加えて、教員による評価、第三者による評価など客観的な評価を実施していく必要がある。さらに、どのような形で看護基礎教育に反映していくかを検討し取り組むことで、カリキュラムの効果的な運用につながると考える。

謝辞

本調査にご協力いただきました豊橋創造大学保健医療学部看護学科の学生、及び教員の皆様に心より感謝申し上げます。なお、本内容は第26回日本看護学教育学会交流セッション「カリキュラム評価の現状と課題—学生、教員からの評価に焦点をあてて—」で発表した内容の一部に、追加修正して報告しています。

引用文献

- 大島弓子, 五十嵐慎治, 古賀節子他:カリキュラム改正の検討過程とその成果, 豊橋創造大学紀要, 20, pp47-65, 2016.
- 坂江千寿子, 上泉和子, 藤本真記子他:看護技術におけるイノベーションの普及に関する研究(第1報)普及に影響する要因の抽出, 青森県立保健大学雑誌, 1, pp75-83, 2004.
- 杉森みどり, 舟島なをみ:看護教育学第4版, 医学書院, 2009.
- 鈴木亜衣美, 織田泰子, 片山由加里:看護学生のクリティカルシンキングが看護実践力へ及ぼす影響, 大阪府立大学看護学部紀要, 21(1), pp13-20, 2015.
- 中央教育審議会分科大学教育部会(2016):「卒業認定・学位授与の方針」(ディプロマ・ポリシー), 「教育課程編成・実施の方針」(カリキュラム・ポリシー)及び「入学者受入れの方針」(アドミッション・ポリシー)の策定及び運用に関するガイドライン, 2016年3月31日.

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/___icsFiles/afieldfile/2016/04/01/1369248_01_1.pdf (2016年11月8日).

参考文献

植村 由美子, 大島 弓子: 過去10年間の看護学実習における看護倫理に関する文献検討, 豊橋創造大学紀要, 20, pp.35-45, 2016.

北川明, 安酸史子, 横山悦子, 他: ディプロマ・ポリシーの到達度を段階的に示したルーブリックおよびカリキュラム・マップの作成, 日本看護科学学会学術集会講演集36回, p.631, 2015.

大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会: 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会最終報告, 2011年03月11日.

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/40/toushin/___icsFiles/afieldfile/2011/03/11/1302921_1_1.pdf (2016年11月8日).

水野 (杉原) 裕子, 池上貴美子, 吉井隆: ディプロマ・ポリシー達成度に対する自己評価アンケートの分析, 甲子園短期大学紀要, 34, pp.49-59, 2016.